
Butterfly

玲架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Butterfly

【Nコード】

N5046T

【作者名】

玲架

【あらすじ】

人生を諦めた女の子、玲名。

” 死んだ筈なのに、どうして生きてるのよおっっ!!!”

玲名は異世界に迷い込んでいた。

彼女が持つ死神の色彩はしかし、この世界では女神の色彩だった。

” 一度諦めた生だけど、今度はがんばってみようかな。”

私を知るひとは誰もいない。

それはなんて、幸せなことだろう

もう一度、初めから。

プロローグ

奪われたら耐えられないから、自分から捨てた。
突き放されたくないから、自分から突き放した。
裏切られるのが怖かったから、信じなかった。

そしたら、気付いたら独りになってた。

生きてたっしょうがない。

「死んでしまおうか。」

どうせこの身体はぼろぼろだ。

「もう、いいよね」

どうせ私は誰にも必要とされていないのだから。

「3、2、1……」

……Let's
「ogg」

せめて、せめて最期くらい、自由を。

そのくらい望んだっいでいいでしょう？

背中に翼が生えた気がした。

一話

頭が割れるように痛い。
息が苦しい。

…苦しい？
なんで？

…私、まだ生きてる？

いや！！死なせて！！もう嫌なのに・・・

「あれ・・・？私・・・」
おかしい。私は死んだ筈で…

ここ、どこ？
「おつ、母さん！！今起きた！！医者となんか暖かいものを！！」
私の傍にいたらしい。

歳は、私より少し上かも知れない。ワイルドな美青年。

ここは、目の前にいる彼の家だろうか。

と、その彼が凄い勢いでこちらを振り返った。

「アンタ、大丈夫…な訳ねえか。
それにしてもすげえ驚いたんだぜ。
海から流れて来るなんてそんな無謀な…。
よく生きてたよ。ところでアンタ、上等な服着てるな、どっかの国
の王子さまかい？」
海から…。て、…は？

「王子様？」

性転換手術なんてしたっけ？

「違うのか？」

いかにも不思議そうな顔で尋ねてくる青年。

「私、王子さまなんてモノじゃない。

それに、女。」

…だよね？

不安になって手を胸にあててみる。

…良かった、女だ。って待てよ？

「…そんなに、男顔だったの？…私。」

落ち込む。と青年は、

「いや、違う、違うんだ。その、女性はスカートを履くだろう？だ
からその、てつきり男性かと…」

いや、違うんだ！！女性みたいな整った顔立ちだが、ズボンを履い
てるから…」

なるほど。この辺では女性はスカートが当たり前なのか。

だからスウェットを着てる私を男だと…、スウェット。

普通の部屋着だ。

別に上等でもなんでもないんだけどな……
まいいか。めんどくさい。

「あ、名前聞いてもいいか？

俺はサステインって言うんだが……」

こちらを伺うように見てくるサステイン。

「玲名・御空木」

旧姓は名乗らない。あんな忌々しい家……

まあ、この苗字は自分で付けたのだが。

「レーナ・ミカラギ？……苗字持ち……貴族か。やっぱりな」「うん
うんと納得しているサステイン。……めんどいな、サーでいいや。

「いや、貴族じゃないし。お金ないし。」

あるけど多分、使えないだろう。

これは多分、俗に言う異世界トリップてヤツだ。

2話

むつかしい事は考えないに限る。めんどくさい。

目を丸くしているサー。

「マジで？」

「…（マジなんて言葉あるんだ。）…マジマジ。大まじめで。」

…とそこで。

ガチャ。

「お待ちませー」

食事を持ったサーのお母さんが入って来る。医者も。

「あ…えつと、お邪魔してます。」

するとサーのお母さんが目を丸くして、その隙に医者がすっと出てきて、私の額に手を翳した。

「ふむ。あと2〜3日安静にしていれば大丈夫だろう。」

「それでは、私はこれで。」

と、医者が出て行った。

……………？なにしたんだろう。

「話は聞いたわ、レーナちゃん。それで、お金が無いのなら、しばらくここに泊まって行く？」

「いいんですか？」

「ええ。私、…可愛い娘が欲しかったの！！！」

「…？有難うございます」

「いいのよー」

と、サーのお母さんが真面目な顔になって、

「それでね？レーナちゃん、

あなた、魔法学園に行ったらどうかしら」

……………？

「私、魔術師だからわかるんだけど、貴女の持つ魔力、尋常じゃないわ。

制御の仕方とか学ばないと危ないから……………」

「私、お金が……………」

「奨学金があるから大丈夫よ。あなた優秀っぽいし」

……………」ぽい”で決めて良いんだろうか。

しかし

「それなら、行きたいです」

学校なんて生まれてこのかた、一度も行ったことがない。

この眼のせいで……………」

それに、魔法にも興味がある。

「そう、良かったわ。じゃあ、三日後、ここを発ちましょう」

「はい。」

それから何だか眠くなって、私は眠ることにした。

「レーナちゃん、起きてねー」

「ん……………。あ、おはようございます。」

「もう、レーナちゃんたら、三日間きっかり眠ってたんだからね！
……まあ、可愛いから、許す。」
「……………」

「よし、じゃあそれに着替えたら声かけてねー」

と、サーのお母さんは服を置いて部屋を出た。

「……………」

明らかにこれ、皆のよりも高そうなんだけど……
まあ、好意に甘えるところでしょう。
これは割と向こうの服に近い型な気がする。

「あの一、」
ガチャ。

「キヤー！！！！なんて可愛いのかしら！！ちょっと高かったけど凄く似合ってる！！あの値段でこれが見られるんだから、安いもんよ！！」

じゃ、行きましようか。」

あ、そうだ。

「こんな軽装備で出かけるんですか？」
「あれ？知らない？ここね、ちょっと歩いた所に学園の近くと繋がってる転移の魔法陣があるのよ。だから、そんなに時間はかからないわ。」

でも高いから、あんまり使えないわね。」

「……そうなんですかあ……………」

転移。魔法陣。

言葉を聞くだけでわくわくする。

「あの、お名前を、伺っても…」

「あらやだ、忘れてたわ！私にはミシユリよ」

ミシユリさん。綺麗な名前だなあ。しかも顔が名前負けしてない。名前が引き立ててる。美人だなあ。

そういえば、私みたいな色の瞳の人はこの辺にいっぱいいるのだろうか。

二人には驚かれなかった。

「あ、そうそう。レーナちゃん、解つてると思っけどあなたのその容姿。赤紫の瞳に銀の髪。童話の女神様と同じんだけど、気をつけなさいね。ぼーっとしてたら攫われちゃうわ。」

女神様…？この忌々しい、死神の色彩が？

「その様子だと知らなかったみたいね。今のうちに言っておいて良かったわ。」

私ならその襲ってきた人を返り討ちにできるのだが・・・
これは言わないほうがいいだろう。

「ついたわ、ここよ。絶対に手を離さないでね」
「わかりました」

ミシュリさんが何事かを呟いて

あっという間に景色が変わっていた。

目の前に広がる商店街。

遠くに見える山と、お城のような建物。多分あれが、学園。

「ここで服を何着か買って行きましょうか。」

「い、いえ、そんな、悪いですよ!!」

今着ている服だつてちよつと高かつたらしいのに!!

「大丈夫よ。」

それに女の子なんだもの、お洒落したいでしょう?」

「ま、まあ、それなりに...」

「じゃあこのお店で。」
早っっ。

ミシュリさんが店に入って行き、私もそれに付いていく。

買ってくれるのはミシュリさんなので、私は邪魔にならなそうなの
窓際で待つてる事にする。

「〜」

ミシュリさん、すごく楽しそう。

3話

あんまり派手な服だったらどうしようと思ったけど、その心配は要らなかった。

派手な服が沢山あるなか、ミシュリさんはさらさらとシンプルで私好みな服を選んでいく。

あっという間にお会計まで済ませ、私の元へ・・・、と、一瞬立ち止まり、目を止めたブレスレットを買って、今度こそ私の元へ着た。

「お待たせ、と、これ付けて。」

と、渡されたのは金のブレスレット。

すごく私好みなんだけど、高いんじゃないだろうか、そういうの。

「え、そんな、頂いてもいいんですか？」

「勿論よ、さあ早く、付けて!!」

そう言われ、付けてみる。

「有難うございます。」

すると、ミシュリさんの笑みが深くなった。

「やっぱり。貴女に似合うと思ったのよ。予想以上だわ!!」

「・・・有難うございます?」

「じゃ、学園に行きましょうか。」

「はい。」

楽しみだ。初めての学校、しかも魔法を学ぶ場所でもある所。わくわくする。

そして、つい苦笑する。

こんなに楽しいのは、生まれて初めてだ。

自分は、こんなに楽しんでいいのだろうか。

後でバチ当たらないかな。

…夢オチだったらどうしよう。もしそうだったらやだな…

「ここよ。ルーナス魔法学園。」

ミシュリさんの声で顔を上げる。意外と近かったのかも。

…やはり、でかい。

4話

あれから手続きをして、
今は試験会場にいる。
グラウンドみたいところ。

この世界の常識知らないんだけど、大丈夫だろうか。
とか思ってたんだが、私の場合、魔力が膨大なので絶対に受かるんだそうだ。

そりゃそうか、野放しにしてたら危険だもんな。

「じゃ、何か魔法を使ってみて。」
と先生に言われた。

……んだけど。

魔法の使い方わかりませーん。

て顔してたら、ミシユリさんが気付いて、とびきりの笑顔で、

「自分の中の魔力を掴んで、やりたいことをイメージするの。なんか言葉と一緒にやったらやり易いわよ。」

でもまあ、レーナちゃんだもの、大丈夫よ 学園生活楽しんでね
とだけ言い残して去って行ってしまった

……何が大丈夫だと？

イラッ。

ま、仕方ない。やるだけやってみるか。

あまり目立つのは得策ではない。まあ、この容姿だと必然的にどうやっても目立たないことは出来ないのだが。

魔力、魔力……。

「あ。」

見つけた！！金色の、水銀みたいな水。

で、何をしようかな？

まあ、ここは無難に。

「雨。」

私の、何よりも好きな景色を。
貴方にもみせてあげるわ。

5話

雨が降りだした。

空は晴れている。

雨が降っている。

優しい、総てを洗い流すような、優しい雨。

自分が溶けていくような錯覚さえ感じる、優しい雨が降っている。

太陽が遠くに輝いている。

決して届きはしないけれど、私を照らしてくれる。

雨は太陽の光を浴びてキラキラ輝き、優しい音を出す。

これは、私が一番好きな景色。

くアシユイsideく

ミシユリが女の子を連れてきた。

人形みたいに綺麗で、女神様の色、赤紫と銀を持っていた。
この学園に入れてあげたいという。

まあ、この子はこの学園に入れなければならない。絶対に。
この膨大な魔力。野放しにしていたら余りに危険である。
ただ多いのではなく、限りが見えないのだ。危な過ぎる。

「じゃ、何か魔法を使ってみて。」

特に理由はない。

女神様の生まれ変わりのようなこの子が使う魔法を、見てみたかった。

6話

始めはただの好奇心。

と、レーナが戸惑っている。
どうしたのだろう？

と、ミシュリが何か思い出したように手をぼん、と叩いてレーナに近付いた。
そして、何をするんだろうかと思っていると、物凄く大雑把な魔法の使い方を教えて去って行った。
どうやらこの子は魔法を使った事が無いらしい。

少し考えて、口を開いたレーナは一言。

「雨。」
「……………」

なんて簡潔な。

と思っていると、確かに雨が降りはじめた。
でも、晴れている。

……………？晴れて？

今日は曇り空だった筈だ。

空を見てみると、確かに晴れている。

と、雨が顔に当たった。

遠くに太陽が見える。

雨があまりにも優しい。

そして太陽を浴びてキラキラと輝いている。

ああ、この優しさは、この子自身なんだろうな。
なんて、柄にもなくそんなことを思った。

7話

長いようで短い雨が、終わった。
空は曇り空。元に戻っている。

皆我に返った。

生徒たちは、今の奇跡の時間を興奮気味に話しながらそれぞれの向かう場所へ行く。

俺達の服は防水魔法が掛かっ
ていて濡れていない。髪も同様。
しかしレーナは濡れている。
びしょ濡れだ。
早く着替えさせなければ。

そこまで考えてふと思いつく。

自然を操る術は、とうの昔に
廃れた筈だ。
相当の鍛練と実力が要るから。

この子は、本物だ。

優しさ、哀しみに満ち溢れ、
空虚な眼をしたレーナが、
不気味な程綺麗に見えた。

と、レーナがこちらを向く。

すでにあの雰囲気は消えていた。

「どうでした？私の、一番好きな、景色。」

俺は何も言えなかった。

8話

とりあえずレーナを着替えさせて、教室を見せて、寮まで連れて行った。

「明日からな。迎えに来るから準備しとけよ。」

「はい。」

そこでレーナと別れた。

礼儀正しい子だなあ。貴族だろうか。

まあ、どちらにせよ今日からレーナは俺の生徒だ。

女神の色彩と膨大な魔力、恐ろしい程のコントロール力を持つ女の子。

大丈夫だろうか。

守らなければ。

あの事件の二の舞は起こしてはいけない。

ダメだ。

もう関わらないと決めたくないか。
俺に関わると皆不幸になってしまう。

お前のせいで皆死んだんだ!!

貴方がいるから皆いなくなってしまうのよ!!

お前(貴方)さえいなければっつ!!!!

あの子に幸多からんことを願いたもう。

9 話（前書き）

どうも、玲架です^^

久々なんで読みにくい所が多々あると思っただけど、

よろしくお願いします（^^O^^）

9話

ルーナside}

あれから私は寮に送ってもらった。

寮は一人部屋。広さは、向こうの世界での私の部屋の半分くらい。

「学園かぁ・・・」

明日からの未知のものに思いを馳せる。

4分の期待と6分の不安。

「友達、できるかな・・・」

友達。

今までそんなモノはいなかった。

私があつ人は抹殺対象・上司・いやらしい事を考える男共。
それだけだった。

だって私は

今日から”ルーナス魔法学園”という所の生徒になる私。

今、教室の前にいます。

なんかここ来る時に、やたら視線を感じただけど。

そりゃそうか。女神の色彩を持つ人間なんていたら、自分の目と存在を疑うよね。

向こうでは死神だったけど。

でもどちらにせよ私にとっては限りなく嬉しくない。

普通が良かったのに。

10話

最初は自分が死んでいない事実には絶望した。

でもここは”私”を知る人が誰ひとりいない世界。

やり直せるかと、思ったのに。

結局何処に逃げたって、世界は変わらないんだよ。何もさ。

くだらねえ。つまらない世界。

上で嘲笑ってる奴がいて、世間知らずのお嬢様がいて、
下で苦しんでる奴がいて、自ら死に行く負け犬がいる。

殺すやつに殺されるやつ、殺しを強制される奴もいて。

でも俺は運が良いかもな。

トップクラスの殺し屋、しかも美人を最期に見れたんだから。

が
なあ、あんたよ、本当はずっと思ってたんじゃないか？自分

「レーナ、入れー」

「はい。」

いけない、感傷に浸ってた。

自嘲の笑みを浮かべ、

またいつもの仮面をかぶり直して。

いざ、出陣。

11話

教卓の前に行き、

「レーナ・ミカラギ、よろしく。」

素っ気ない自己紹介をした。

皆、私が入った時目を見開いた。

でも私の自己紹介を聞いたらさらに目を剥いた。

なんか変な事したっけ？

まいつか。めんどくさい。

アシュイ先生を見ると、面白そうな顔をして、窓側の一番後ろを指した。

頷いて、そこに行く。

周りを見てみるが、

何故かすごく驚いている様で、あんまり期待出来そうに無いのでと
りあえず寝よう、と思った。

昨日無駄に期待してしまっただけであんまり眠れなかったのだ。

自分に注がれる沢山の視線に少し失望感を味わいながらも、

気が付くと景色は変わっていた

12話

薄暗い部屋。

そこかしこに転がるヤク中の人間達。
すべてを本能に任せて情に勤しむ男女。

目の前にはひょっとこの面を被った上司の男。

私が被っているのは狐。

淡々とした声が告げる。

「今晚、東堂 玲兔^{あきこ}だ。」

「了解。」

今回の任務内容である。

対象は昔、唯一私に優しくしてくれた人。

結局は下心だと解ったけど。

私はこの世に存在し続ける限り、逃れられない。

最初は弱みを握られ、脅されて始めたこの仕事。

殺し屋。

でも人を殺してみてもわかった。

私はこちら側の人間だ。

いつの間にか私は、”殺人”という行為に喜びを覚えていた。

殺しを始めて、気が付くと辺り一面、血の海になってるんだ。

いつしか自分に恐怖を抱くようになった。

この仕事をするには感情の総てを棄てなければならない。

そうしなければ正気を保てないからだ。

気が狂った人形は、早々に処分される。

…弱い自分に嫌悪を感じる。

13話

自分のしたことがとてつもなく恐ろしく感じた。

死神。

そんなキレイなものじゃない。

悪魔。

そんな可愛いものじゃない。

私は、私は

私八、何？

「あゝあゝあああああああああつっツ！……！」
自分の叫び声で目が覚めた。

「……あれ？」

どうしたんだろう。

背中がやけに濡れている。

嫌な夢でも見たんだらうか。

ふと軽く首を傾げて、視界が不明瞭なことに気づく。

そういえば、酷く気分が悪い。

滅多に崩れることのない自分の体調の変化を不思議に思う。

授業は気になるけど……寮に戻らうかな。

立ち上がって、

「先生。気分が良くないので私、」
帰ります。

そう言いかけて、意識が薄らいで……

あれ？私、どうしたんだろう。

周囲の光景がやけにスローモーションに見えて。

ああ、そういや人って死ぬ時、時間がゆっくり回ってるように見えるっての、

本当だったんだね

暢気に今の自分の状態を分析してみる。

アシュイ先生がこっちに走って来るのが、視界の端に映った気がした。

14話

「ん……」

はあ。嫌な夢見たな。

と上体を起こして、ふと思う。

ここ、どこだろう？

目を開けて自然と飛び込んできたのは無垢な白。

私の部屋は茶色いだけけれど…

そしてふと気付く。

薬品の匂い。

………病院？

気持ち悪い。近寄るな

アンタのせいでアタシはっっ…!!

…あんななんて死ねばいいのに。

へへっ。なかなかの上玉じゃねえか。おい、お前等!! 今日
はこの女やるぞ

「…やつ。嫌!! 嫌嫌嫌嫌あーっっっ!!!!」

ガラッッ

「どうした!?!」

男が近寄ってくる

「嫌っ来ないで!?!」

「来ないで!?!来ないでよおおっ!?!」

そして目の前が真っ暗になった。

15話

…視線を感じる。

こちらを無遠慮に観察して、でも純粹にこちらを心配してるような
・
・

アシユイ先生？

…いいや、そうじゃない。

ミシユリさん？

…も、違うか。

じゃあ、ダレ？

「あ、起きましたね。」

「えっと…?」

さっきまでこちらを観察していた視線の正体は、メガネをかけ、白衣(?)を着た20代前半くらいの男性だ。

…しかも、またもや美形。

…「この世界に普通の出会いはないのかっつ。

っつ。

「あの……………「うん」って…………？」
どっどす？

すると白衣の美形は目を見開いて、

「覚えていないのですか？」

さも驚いたように。

「あれは噂になった程の事件なのに……」

……………事件？

16話

「何かありましたっけ？」

「え、ええ。あれは生徒の気も緩みはじめた昼飯前。絹を裂いたかのような悲鳴が突如廊下中に響き…」

バタツツ

「レーナは大丈夫かつつ?!」

「ええ、この通り。」

ただ、少し記憶が無いようなのですが・・・」

アシユイ先生だ。

「先生、どうかしましたか？」

……………あと、ここは…、

医務室？」

あれ。何でこんな所にいるんだろ。

先生もなんか、慌ててるし。

「頭は打ってないのでしょう？」

「ああ、そうなる前に俺が間に合ったから」

「おかしいですねえ…」

「魔力の逆流か？」

「いえ、そのような痕跡もありませんしねえ……」

大人二人が眉を顰めて頭つきあわせて。

うーん。なんとも不思議な光景だな。

17話

くアシユイsideく

女神の色彩を持つ子の入学試験を終えて一晩経ち、いよいよ今日から登校だ。

…特に話すことも思い当たらずに一人とも長い廊下を無言で歩き。

いよいよ教室の前に立つ。

「呼んだら入ってきなさい」

「……………」

…呼び掛けたが返事は無し。そして無表情。きつと緊張してるんだろう。

そう思い直して先に教室に入る。

すると窓側の男子が、

「せんせーい、今日うちのクラスに新しい生徒入ってくるってゆーの、本当?」

と聞いてきた。

一体どこからそんな情報調達して……………って、昨日のアレか。

「ああ。そつだ。」

と応えると、

「よっしゃ、賭けは俺の勝ちだ！！！」
と飛び上がった。

…賭けしてたのかよ…。

何を賭けたか気になるだろうが。

全く。この生徒は。

まあ、あんまり待たせるのも良くないしな。
そろそろか。

「レーナ、入れー」

「はい。」

小さいがはっきりした声が聞こえて。

教卓の前に行き、

「レーナ・ミカラギ、よろしく。」

と素っ気ない挨拶をすれば。

ただでさえ女神の色彩に驚いていた生徒達の間が、更に驚きでひん剥かれた。

しかし驚いたな。

女神そのものみたいじゃないか。

面白い。

伝承により伝えられている女神様の性格の一部。それは、

”口数が少なく、面倒臭がり”
なんだとか。

19話

…それぞれの自己紹介の為、今日は特別にHRの時間を増やした。

……のだが。

レーナ・ミカラギはというと。

席に着いた瞬間に、机に突っ伏した。

緊張して疲れたんだろう。

そう思って俺も生徒達もその姿を眺めるにとどめておいた。

サラサラの銀髪はどこまでも艶やかで腰辺りまで伸び、品よく整った容姿は目を開くと大きな赤紫の宝石が現れる。

その肌は赤ん坊のように、いや赤ん坊のそれよりもきめが細かく、その体軀は見ている者の庇護欲を掻き立てる程に華奢なものだ。

一体、どこの没落した王族なのか。

謎は深まるばかりだ。

20話

観察をしているとレーナがいきなりうなされた。

生徒達は心配そうに、でも遠まきに眺めている。

女神に近寄る勇気がないのだろう。

「あゝあゝあああああああああつツ！……！」

いきなりレーナが叫び声をあげた。

そんなになる程の悪夢を見たんだろうか。

顔をあげたレーナは、どこまでも虚ろな表情で、その目には深い闇以外に何も映っていないように思えた。

数秒後、意識が戻ったらしいレーナは。

唐突に立ち上がった。

21話

その時、唐突に立ち上がったレーナに驚いていた俺達は、彼女がどんな状態だったのかを失念していた。

「先生。気分が良くないので私、
帰ります。」

多分そう言おうとしたのだろう。

…が、それは言葉にならず。

レーナの身体が一瞬クラツとして、倒れ……

冷静に観察している余裕は吹っ飛んでいた。
気付けばレーナの元へ全力で走っていた。

この教室は設計ミスか何かで、異様に広く造られているのだ。

レーナの頭が床に落ちるまであと3秒…、2…、1…!!

「
なんとか間に合った……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5046t/>

Butterfly

2011年9月19日19時31分発行